

参加者の声③

組織内部へのアピールポイント

—ワークショップを通して考えたこと—

山口県文書館 伊藤 一晴

「アーカイブズは自治体の貌たりえてるか」－ 初日の基調講演において大濱理事が投げかけた言葉は、少なくとも私にとっては耳の痛い言葉であった。なぜなら、その実現のためには、アーカイブズ＝公文書館が、公文書の源泉である自治体自身にとって、自らを語るかけがえのない施設として認識されることが、当然の前提となるからである。しかし実際には、開館から45年を経過した当館においても、施設の機能や意義が十分に知られているとは言えず、組織内部へのアピールは、今以て重要な課題の一つなのである。

このような現状の中で公文書の引き継ぎ業務を担当している私にとって、実際のリーフレット作成を通して組織内部へのアピールポイントを浮かび上がらせる今回のワークショップは、大変有意義であった。約1時間半の協議を経て各グループから報告されたリーフレット案やアイデアを詳細に示すことは紙幅の都合上できないが、雑駁にまとめると以下の3点になると思う（3点の集約は筆者個人の考えで、会議においてまとめられたものではない）。

- ①公文書館に対し組織内部が感じている不安感を減じる。 →信頼性
例) 非公開期間の説明、業務フローの説明、移管実績の提示など。
- ②公文書館が組織内部に対して役立つことを伝える。 →有用性
例) 行政上の利用方法説明、職場の省スペース化・保存環境の説明など。
- ③公文書館の機能が公益に繋がることを伝える。 →正当性
例) 公文書館制度の意義、公文書＝市民の共有財産の説明など。

これらの意見に対して、組織内部に対して説得力のある選別基準や非公開期間の設定、業務上の利用に対する迅速な対応や保存環境整備のための人員・予算の確保が前提となるといった現実的な指摘がなされた。

組織内部に対し公文書館を重要な「貌」として意識させるには？結論が出た訳ではないが、ワークショップを通して可能性を感じた貴重な時間であった。